日本とナチス獨逸

海軍大將
末次信正著

ARS

日本とナチス獨逸

海軍大將

末次信正著

ナチス叢書

アルス刊

責任編輯

陸軍中將 大島浩閣下・小島威彦

ナチス叢書刊行の言葉

支那事變を契機とする皇道世界維新戰の發展は、これに呼應する第二次大戰により、歐洲全土を獨伊樞軸ブロックと化し、この世界史的轉換は、まさに、英米民主主義共同戰線を結成せしめ、インド、南洋、濠洲、カナダ等全面に亙る對日封鎖陣を形成せしめんとする。ナチス・ドイツは何によつて、かくも壓倒的勝利を獲得したか。これこそヒットラー總統が、日獨伊防共樞軸による、ゲルマン圏の確立によつて實現し得たものであり、しかも今や英本國攻略により、イギリスの植民地分離は、更に新しき世界長期戰に發展せんとする。

まさに新興ドイツは、我が日本の國體を研究し、日本精神を體得して、荒廢せんとする舊歐洲に、新しき世界を建設せんとする。

かくてドイツを知ることは、日本を知ることであり、また日本を知ることは、ドイツを把握することである。

本叢書は、この日本――ドイツの緊密なる世界史的關係を認識し、再强化するためにナチス・ドイツの本質を闡明せんとし、併せて、我が日本が何を爲すべきかの焦眉の問題に對する、明確なる解答を與へんとするものである。

序

自分は、日常非常に繁忙な生活をしてゐるので、數多くの書籍を渉獵して綜合的に、學究的に種々の研究するなどといふ暇がない。たゞ世界の歴史が如何に動きつゝあるか、如何に世界の情勢が轉換し進展しつゝあるかについては、他人の頭腦を通してではなく、自分の目で觀て、實際の事實、卽ち現實を直視することに依つて、これらを綜合し、或は歸納することに依つて、その結果、どう現はれて來るか、といふことだけは、つまり結論だけは絶えず注意してゐるものである。かるが故に、茲に述べることも、所謂世の勉强家或は多方面に

亙つて廣汎な知識を持つてゐる人達の事物に對する研究の態度から見たならば、所謂粗旨大要で、お話にならぬと思はれる。然しながら、自分の信ずるところでは、解説や説明に於て、どれほど體裁を整へた立派なものであらうとも結局それは附燒刄といふものであつて、本當の信念といふもの、本當の見透しといふものは、さういふところから出て來るものではなく、人類に授けられた靈妙なる本能の働きから出て來るものであると、思ふのである。それが、餘り色々雜多なことにこだはると、その靈妙な本能の働きが鈍くなる、本能の明淨な鏡が曇るのである。一切の邪念を去つて、虚心坦懷、無我無心である時、初めて森羅萬象一切の本物のものが、心の鏡に映ずるものではないかと思ふ。

さういふ氣持で、自分は今まで終始一貫やつて來てゐるのである。普通の人から見れば、自分の云ふところ甚だ獨斷であり、牽强に見えるかも知れぬが、自分はさうと信じたところをそのまゝ云つてゐるのであつて、云つたことが當るか當らぬかは、今後の事實の展開に俟つより他はない次第である。本書を讀むに當つては、さういふつもりで自分の云つたこと、書いたことを讀んで貰ひたいと思ふ。

昭和十五年十一月

末次信正

目次

目次

日本とナチス獨逸

日獨伊三國同盟

一、三國同盟の性格

今度、日獨伊三國間に締結せられたる三國同盟に就いてであるが、いま世間では、今頃になつて三國同盟を締結しても、結局それはナチス・ドイツのため一方的に利用されるばかりではあるまいか、かういふことに就いて非常に疑問に思つてゐるといふことをよく聞くのであるが、玆で少しこの問題に就いて述べてみたいと思ふ。

無論三國同盟は、ナチス・ドイツも、これをドイツの目的に向つて、現實の立場から大いに利用するであらうと思ふ。さうとなれば、日本もまたこの同盟をよく利用すればよいわけであつて、ドイツ側にのみ利用されるばかりであるといふ見方は間違つてゐると思ふのであ

る。

元々、世界の情勢上、歐洲に於ける獨伊と東亞に於ける日本とが、直接目に見える利害關係のみで結合したといふ風に考へることは、この三國同盟に對する世の所謂、認識不足といふものではあるまいかと思ふのである。

併し、從來諸國家間に締結されて來た同盟などといふものは、それが如何なる種類の同盟にしても、總て國家間の利害關係から出來てゐるものであつて、締結した國家間の利害が一致してゐる期間だけは緊密に提携し、條約を履行して行くのであるが、一朝利害が一致しなくなると、敝履の如くこれを棄てゝ顧みない。かういふ工合であるから、離合集散といふことが國際關係の常態であつたのである。併しながら、今度の日獨伊三國同盟といふものは、かうした從來の同盟とは餘程趣きの違つたものであると、自分は思つてゐる。

世界の歴史の上に求めても、かういつた風の同盟といふものは、ちよつと類例を見出すこと

とが出來ないと思ふ。それ故、或る人々は、この同盟を、思想戰或は文化戰のための同盟であつて、從來の觀念では、直ちにその精神に當て嵌まらぬ、といふ風に云ふ。しかしそればかりではあるまいと思ふ。勿論、一方には、利害關係が當然それに附隨してゐることは玆に改めて云ふまでもないが、この同盟に依つて、所謂革新國家卽ち全體主義國家群と、舊體制國家卽ち民主主義國家群とが、明白に相對立することになつて、これが政治的に、經濟的に、軍事的に、また他の角度から見れば、思想的に、文化的に、非常な尖銳なる爭鬪をこれから展開して行くことになつたのである。そこに世界の歷史が一大轉換を遂げるのに、これが重大な契機になるといふことは、間違ひないことである。如何なる觀點から見ても、この三國同盟が世界の歷史の上で、非常な一大出來事であるといふことは、間違ひないと思ふ。故にこれをナチス・ドイツのみが利用するといふ風に考へるのは、一つの僻みと云ふべきではあるまいかと思ふ。

三國同盟の成立に依つて、東亞に於ける日本、歐洲に於ける獨伊といふ三つの新興國家があつて、これが政治的に、經濟的に、軍事的に、緊密に相提携したのであるが、この三國同盟といふものゝ間に、ソヴイエト・ロシアといふものが挾まれてゐるといふことを考へなければならぬと思ふ。

二、三國同盟とソヴイエト・ロシア

歐洲に於ては今やドイツが國運を賭して大國イギリスと死鬪を續けてゐる。この絕好の機會を利用して、ソヴイエト・ロシアが飽くなき慾望を遂げようといふのは、現在のドイツにとつて重大なる惱みであると思ふ。

また東亞に於ける日本としても、英米の利害關係とは、斷然兩立することのない東亞新秩

序の建設をしようといふ秋に當つて、北に境を接してゐるソヴイエト・ロシアと鬪爭を續けて行かなければならぬといふことは、これまた重大な惱みである。

然るに、その獨伊と日本とが、東西相呼應して三國同盟を締結し、玆にしつかりと結びついたといふことは、萬一ソヴイエト・ロシアが獨伊に對して敵對行動に出る時には、背後を日本から狙はれるし、日本に對して敵對行爲に出ようとするならば、歐洲方面で獨伊に睨まれるといふことになるのであるから、いくら無謀なソヴイエト・ロシアであつても、從來のやうな不羈奔放な、不遜な態度を以て今後も續けて行くといふことは、甚だ難しい事柄であると思ふのである。

或はソヴイエト・ロシアがイギリス若くはアメリカと結ぶといふことも、考へられないことはないが、ソヴイエト・ロシアにしても、直接國境を接して居り、直接の利害關係を持つてゐる國との關係の方がより重大な問題であるから、その好むと好まざるとを問はず、この

日獨伊三國同盟といふものが、ソヴイエト・ロシアの進退行動について極めて重大な影響を持つことは、無論常識的にも明白なことである。

更に進んで考へてみるに、日本と獨伊とは、現在及び將來に於て、利害が正面衝突するといふ場合は、ちよつと今のところ考へられない。提携が益々强化するとも弱化する虞は決してあるまいと思ふ。

一方ソヴイエト・ロシアになつてみれば、獨伊とも衝突する可能性があるし、日本とも衝突する可能性があるので、三國が緊密に結びついてゐる限りは、そのいづれの一國とも敵對の立場に立つといふことは、ソヴイエト・ロシアに取つて大いなる不利である。遠交近攻といふ外交は昔からあることであるが、今日英米と結んで直ちに遠交近攻を活用するといふことは、英米の現狀に於ては、ちよつと望みがないことなのである。

これ等の點を綜合して考へてみるならば、日ソの國交調整といふことは、どの程度にまで

行くかは問題ではあるけれども、兎に角、調整され得るものであると考へざるを得ないのである。それがお互の利益である。たゞソヴイエト・ロシアとしては、不凍港を得たいといふのが、帝政時代からの傳統的國策なのであつて、現在に至つても東にも西にも出口といふものがないのである。さうすると、その眞中に出るより他に途はない。その眞中に出る途といふものを、日獨伊三國が認めるといふことになれば、日本も、ドイツも、イタリーも、ソヴイエト・ロシアも、いづれも立つて行けるといふわけであつて、そこに、日獨伊とソヴイエト・ロシアとの國交調整の活路が開けて來る、かう見なければならぬと思ふ。

三、三國同盟と獨伊

ドイツとイタリーは、現に三國同盟を活用して、バルカンから近東方面に進出を試みてゐ

るのである。それについては、ソヴイエト・ロシアと當然諒解がなければならぬ。新聞では、諒解があるとかないとか色々に傳へてゐるのであるが、これは必ずやそこに何等かの諒解が成立してゐるものと見るのが至當であらうと思ふ。

これは三國同盟のお蔭で、獨伊がさういふ動きが出來るやうになつたのである。獨伊のイギリスに對する上陸作戰は、今にも行はれるやうな情勢を示しながらも、なかなか一般の期待に副はないで、突如として近東方面に作戰を開始したといふことは、私の觀るところでは、歐洲戰が相當に長期に亙るものであるといふことを覺悟して、かうした策戰に出てゐるものであると思ふ。

長期戰に堪へて行くには、その經濟圈を擴大し、强化するといふことが、何よりも大事な問題であつて、現在、第一次世界大戰當時よりも、比較にならぬほど遙かに有利な大地域に亙る經濟圈を、今日の獨伊は既に占めてゐるのであるが、まだまだそれでは決して十分とは

云へないのであるから、その經濟圈の擴大强化に向つて、今努力をしてゐるのである。三國同盟は盟文によつて明かな如くに、十年間は必ず續くものである。これを全幅的に活用して、經濟圈の擴大强化を圖つてゐる次第で、彼等の志すところは決して小ならずと自分は思つてゐるのである。

四、三國同盟と日本

かういふ風に三國同盟が活用されて、そこで初めて同盟の意義があるのであつて、同様に日本としても、この同盟を活用しなければならぬ。

現在日本がやつてゐる外貨獲得經濟といつたやうな、嘗てドイツが第一次歐洲大戰で參つたやうな、先の見込のない經濟政策を以てこの大事變を解決することが出來るわけのものでで

はない。況んや大東亞の新秩序の建設などといふ大事業は、それでは到底遂行することが不可能であると云はざるを得ないのである。

然らば如何になすべきであるかといふに、それは、この三國同盟を活用して東亞の自給自足經濟圈といふものを、どうしても確立しなければならぬのである。併しこれは相當大地域に亙つて確立されなければならぬのであつて、現在政府はこれを大東亞共榮圈と名付けてゐるのであるが、名稱はどうあつてもよい、要するに大地域の經濟圈の確保といふことが行はれなければならぬのである。

この大東亞共榮圈といふものゝ實現を速かに圖らなければ、日獨伊三國同盟が成立した、かういつて徒らに手を束ねて待つて居つたところで、この事變の解決にも、東亞新秩序の建設にも、何等貢獻するところがないのである。

さういふところに三國同盟の本當の意義、本當の目的といふものが見出されなければ、こ

の三國同盟の意味をなさぬのである。

五、三國同盟の眞意義

現在日本が歐洲に出兵して直接に獨伊を援助することが出來ぬと同じく、獨伊もまた東亞に兵を動かして日本を援助するなどといふことは、現在出來ない狀態にあるのである。

海上の交通が現在のやうに何時でも遮斷され得る狀態にあつては、それをやらうとしても到底不可能である。故に、東亞と歐洲との三國間の交通といふものは、今のところ北方のソヴイエト・ロシアを通してこれを行ふより他に途はない。つまりこの管が詰まつて塞がつてゐたのでは、切角の三國同盟といふものゝ實效を擧げることが出來ない。この通路たる管を何時でも完全に開いて置くことが緊要であつて、その重大さは、交通の便不便や、交通量の

大小とかいふやうなことは、寧ろ第二義のことである。

兎に角、この管を完全に開通させて置くといふためには、日獨伊三國とソヴエイト・ロシアとの間の國交は、何處までも調整されなければならぬ。不侵略條約は勿論、進んで經濟の提携とまで行くならば、これに越したことはないのである。

併し、それを何處までも妨害しようといふのが、また英米の狙ひである。英米としては、何處までもソヴイエト・ロシアの抱込みといふことに必死の努力を現在やつてゐるし、また今後も續けて行くことであらうと思ふのである。

然しながら、ソヴイエト・ロシアとしても、如何に英米の抱込み政策があつたからというて、そればかりでソヴイエト・ロシアがどう動くといふわけのものではなく、歐洲及びアフリカに於ける獨伊の地位がますます鞏固なものになり、これと並行して、日本の大東亞共榮圈といふものが段々とその地步を固めて進んで行くといふことになれば、いくら英米が抱

込みに努力して見たところが、ソヴイエト・ロシアとしては、三國同盟側につくより他に仕方のない羽目になるのであつて、これまた是非さうしなければならぬものであると、自分は思ふのである。

スエズ運河から紅海にかけての地中海と印度洋の通路が獨伊の掌中に歸する一方、大東亞の共榮圈が日本に依つて確立されたといふことになれば、こゝに初めて日本と獨伊との提携が、ソヴイエト・ロシアにのみ依ることなく、海上に於て直接手を握ることが出來るのであつて、さうなれば、三國同盟といふものは、英米が如何ともすることの出來ない世界的な支配勢力になることは當然のことである。

今日の事態は、イギリス本土がドイツに直に攻略されるとか、それには相當の暇が取るとかいつたやうな問題よりも、日獨伊三國の精神的、また地理的な實際の提携が何時實現するかといふことに依つて、世界戰の大勢が決するのであると自分は思つてゐる。

六、日本と英米

今のところ日本と英米との關係は、ビルマ・ルートに依る蔣介石政權への援助、蘭領印度に對する英米の支援といふやうな問題で、相當面倒なことになつて來て居るが、これは結局議論の問題ではなく、實力が最後の結論であると思ふ。イギリスとしては、ドイツといふ大敵を向うに廻して戰ひながら東亞の方面に實力を行使するなどといふ餘裕はないのであるから、專らアメリカをしてこれに當らしめるといふ方策を取つてゐるし、アメリカもまたその氣になつてやつてゐるやうであるが、アメリカとして見れば、東亞の問題は要するに利益の問題であつて、國家の死命を賭する、つまり死ぬか生きるかの問題ではない。然し、日本及び東亞に取つては、これは死活の問題である。その結果がどうなるか、またどういふ歸結を

取るべきかといふことは、何も識者を俟たずとも自ら明かである。
紙の上で比較した海軍力の優劣とか云つたやうな問題が、事實に於てはどれほどの働きをするものかといふことは、英獨海戰に於ける今までの經過を見れば、明々白々な事實である。
從つてこんなことで東亞の大問題が解決される筈のものでは決してない。アメリカがいくら頑張つてみたところで、その海軍力を提げて東亞に乘込んで來て、それで東亞の事態を解決しようなどと考へたならば、それは自ら好んで墓穴に投ずるものであつて、恐らくスペインのアルマダの二の舞を演ずることになるであらうと思ふ。これは專門的に亙るから云ふを憚るところであるが、日米の海軍力を、東亞の錯綜した地形、艦隊の食糧及び彈藥の補給の關係、自然の氣候、風土の保健に及ぼす影響その他一切のものを引括めて考へる時、何れの側に勝算があるかといふことは、專門家を俟たずしていいとも明瞭である。或はイギリスの海軍が英獨の海戰には直接大した役目をしなかつた。それでその餘裕ある勢力を以てアメリカと

合併し一緒になつて東洋に出て來たら、と云ふやうなことを心配する向もあるが、本國の危急を救ひ得ずにゐるのに、それを見捨てゝ東洋に來るなどといふことは、英國人として考へ得られないところである。またたとひ日本より優勢な海軍力が東亞に來たからといつて、直ちに優勢な海軍が物を云ふかといふと、決してさうは行かない。假に十のもが二十の力になつて來ようとも、それは机上の勢力であつて實際にその效果を發揮し得ないといふことは、今アメリカの場合について云つたと何等變りはない。よしんばイギリスの全海軍が來たところで、決して恐るべきものではない。況んや一部を以て東亞の海面などに來るならば、これこそ所謂各箇擊破に遭ふわけで、戰略上取返しのつかない過誤を犯すことになることは、日露戰爭に於けるロシアの海軍兵力の戰略的配備を誤つたその實績を觀れば明白に分るところである。

七、三國同盟活用の眞諦

要するに、三國同盟について、日本に或は獨伊側に不利な條件のみを數へ立て、而して相手側の有利な點のみを拾つて結論を出すといつたやうな傾向があるやうであるが、さういふ場合も無論考慮の中に置かなければならぬが、その反對に、敵にとつて極めて不利であり、味方にとつて極めて有利であるといふ方面を忘れてはならぬ。大體に觀るところ、東亞に關する限り、日本の軍事的また經濟的地位は極めて優勢であるので、全體から云うて、歩は確かに此方にある。この確信の下に、日本として今爲さんとするところを、恐るるところなく堂々と、着々と實現して行けばそれでよいのである。三國同盟の如きもこの意味に於て何處までも利用し、活用して行かなければ、折角今までやつて來たところのものが何もならなく

なり、單なる飾り物に過ぎぬことゝなるのである。

話があまり戰略的方面のことのみに終つたが、要するに三國同盟は御詔勅にも明示されてゐるやうに、此方から進んで戰ふといふのでない、世界の平和の爲に戰局を現在以上に擴大しないで、地域的に、民族的に國家集團を作つて、そこに新なる秩序を樹てよう、東亞には日本を指導者とする國家群、歐洲、アフリカには獨伊を指導者とする國家群、その間にソヴイエト・ロシア、西半球にはアメリカを指導者とするアメリカ國家群、かういふものが出來ることが、先づ以て地域的に平和が確立される所以であつて、その各國家群が、互に相侵さず、その地域に於ける國家民族の發展を圖つて行く、これが世界平和の第一歩でなければならぬ。併しこれは世界を横斷的に地域の大部分を占領し、政治的に、且つ經濟的に世界をこれまた横斷的に支配しつゝあつた現在の所謂舊體制と、到底兩立し難いものである。

一體、どちらがよいのであるか。舊體制を採るか、新體制を採るか、我々は斷じて舊體制

に同意することは出來ない。何處までも新體制、新秩序の建設に對しては、如何なる犧牲を拂つても、その實現に邁進するより他に途はない。若しこれを妨害しようとする國家がありとすれば、これと衝突することは止むを得ない、覺悟の上でなければならぬ。

これが現在の世界戰の本當の意味であつて、この問題は、我々もその革新の方向に向つて著々その步を進めつゝあると同時に、必ず有終の美を濟すものであると確信してゐるものである。

日本とナチス獨逸

一、世界戰爭の意義

まづ現在の支那事變及び歐洲戰爭に共通する世界史的動亂の意義をとりあげてみる。色々な觀察が行はれて居るやうであるが、私は初めから支那事變も歐洲の戰爭も全然同じ意義のものであると、から考へて居た。今日ではさういふ見解が相當に行はれるやうになつてゐるが、つい先頃までは、その點が十分に認識されて居らぬやうであつた。支那事變は、日本と支那との戰ではなく、支那を今日の如き白人の植民地體制に持つて行つて居るこの支那の背後にある政治的、經濟的の第三國の勢力と日本との戰である。既に四年掛りで蔣介石政權と戰つて居るが、今以て解決がつかない。これからまだどれくらゐ掛かるか分らないといふの

も、畢竟第三國あるが故であるといふことは申すまでもない。第三國とは即ち英・佛・米であり、ソビエトである。この意味に於て獨り歐洲戰爭と言はず、支那事變もこれ亦世界大戰の一つである。直接この事變に介入してゐないのはドイツ及びイタリーであつて、その他の世界の大國は總て支那事變に關與して居るのである。直接に兵力を以て參加しないでも、思想的に、經濟的に、或は武器の供給など、色々な方法に依つて、直接又は間接に支那を援助して居るのである。最近に至つては、歐洲戰の急激なる發展に依つて英佛が歐洲方面に全力を注がなければならぬ結果、英佛の利益を代表して、アメリカが日本に對して極めて强硬な態度で臨んで居るといふことは、ドイツ及びイタリーが間接に支那事變に介入して居るといふことを實證して居るのであるから、今日ではもう紛れもない世界大戰の一つである。歐洲戰爭は今更申すまでもなく、これは單なる英獨の爭覇戰ではなく、ヴエルサイユ體制に依つて窮地にまで追ひ詰められたドイツが、最近樹直つてヴエルサイユ體制を徹底的に根本から

引繰返すことに依つて、沒落の一途を辿る近世ョーロッパを否定し、新なる秩序の下にョーロッパを再建し、更に新なる世界建設に進まうといふ、所謂舊秩序に對する新秩序の戰である。この意味に於て支那事變とその根本の性格に於て同じものである。これが既に世界大戰であることは、今、支那事變について述べたと同じく、直接戰つて居るのは獨伊對英國ではあるが、經濟的に思想的に或は宣傳的にアメリカ、ソビエトは既に參加して居る。日本は不介入といふ聲明を出して居るが、實質的に介入して居るのと同じことである。現在ドイツが日本に向つて何を求めて居るか。何も求めることはない。たゞアメリカを確つかりと抑へて置いて貰ひたい。これが唯一最大のドイツの希望である。英國が東洋から手を引いた結果、アメリカがその代理を買つて出て日本に對して高壓的態度を執つて居る。日米關係は日に日に惡化する。既にアメリカが日米通商協定を一方的に廢棄して以來、この關係は惡くなる一方である。東亞に於ける英國の利益を代表することをアメリカが買つて出たといふ結果が、ド

イツに對しては、これが物怪の幸といふもので、アメリカは到底實力を以て英國を援助し得る餘裕はない、この機會に英國を叩きつけてしまへ、かういふのが、ドイツの對英作戰の根本を成して居るのである。この意味に於て、日本は間接にドイツ、イタリーの作戰に重大な貢獻をして居るのである。日本の一部に於ては親英若くは親米、さういふ空氣が支配的であつても、事實に於てはその反對になつて居る。ドイツに對して彼が最も望む所のものを與へながら、而もドイツが感謝が出來ないやうに仕向けて居るのは、何たる間拔けであらうかと言はなければならぬ。この支那事變に於いて、誰が敵であるか、誰が味方であるかといふことがはつきりしないで、世界史的の大戰が片がつくわけがない。蔣介石と戰つて居るのではない、その背後の力と戰つて居る。その背後の第三國と戰つて居るといふならば、これは明白に我が日本の敵でなければならぬ。然るに、蔣介石政權が英米の經濟力に依存すると同じく、日本も亦英米の經濟力に依存して居る。從つて汪兆銘も然らざるを得ない。それで、こ

の事變が解決しよう筈はないのである。此處に根本的な錯誤があると思ふ。今やフランスは再起出來ないまでに徹底的に打擊を受けた。今やフランスの艦隊は、イギリス艦隊と戰つて居るといふ狀態である。英佛は再び手を握ることは出來ない。イギリスは愈〻以て孤立になつたわけである。結局イギリスとても本國を何時までも持ちこたへることは出來ないであらうと思はれる。世間で傳ふる如く、カナダまで退却しなければならぬかも知れぬ。殘る所は歐洲に於けるドイツの壓倒的の勢力、南北アメリカを支配する所のアメリカの勢力といふものが、相頡頏する時代に段々と進んで行くばかりである。既にもうさうなつて居ると見ても差支ないと思ふ。獨米の相對峙して居るこのバランスは、之を左右する力は何であるかと言ふと、卽ち我が日本の力である。日本といふ分銅をどつちかに投ずることに依つて、將に來らんとするドイツ對アメリカのバランスといふものがどうにでも引つくり返るのである。之を私は豫てから言うて居るのである。世界大戰の最後の決はどうか。最後の鍵を握るものは

我が日本である。かういふ風に考へて居り、觀て居つたのであるが、段々とそれが實證されて來る時代となつたのである。

二、支那事變
――日本の立場――

世界大戰の意義を私は大體さういふ風に大觀するのであるが、更に突込んで、支那事變はどうか、歐洲戰爭はどうかといふ風に、別々に研究して見たいと思ふ。支那事變が起つた時には、これは現地で解決したい、之を擴大しては大變である、かういふのが常識であつた。中には、これは容易ならぬ大戰になる、現地解決などで收まりのつく事變ではない、かういふ風に觀て居つた少數の人もあつたが、大體は現地解決、不擴大が當時の常識であり、政府の方針もさうであつた、そこで之を北支事變と名附けて居る。ところが上海に飛火したりし

て、北支事變では如何にも工合が惡いから今度は支那事變と名前を改めたのである。上海に飛火しても依然として現地解決、不擴大といふ方針を堅持して進んだのであるが、事實は上海を陥れ、南京を取り、徐州の大會戰から進んで漢口、廣東の攻略となり、海南島から南寧、重慶に進んでも解決しない。不擴大どころか擴大の一路を進んで來たのである。吾々は前線に於ける陸軍なり海軍なり空軍の勇戰奮鬪に對しては滿腔の敬意を表する次第であるが、國としての事變の處理の方針、今まで打ち來つた手については、果してあれで宜しかつたのであらうかといふことを、篤と研究しなければならぬと思ふ。

支那事變は丸三年を過ぎた。確つかりしなければならぬ。これから先まだ前途は遼遠であるぞと云つたやうな、たゞさういふ有り來りな記念の仕方では意味を成さぬと思ふ。『孫子』にもある通り、戰は拙速を尊び、巧遲を忌む。今までの戰は決して拙速でない。巧遲の甚しきものであつたといふことをこの機會に思ひ出さざるを得ないのである。何故そんなにだら

だらと長くかゝつたのか。之をこの機會に再檢討して見なければならぬと思ふ。北支に事件が起つた時、それは北支事變でも宜いであらう、現地解決も結構ではあるが、上海に飛火した、向ふが計畫的に攻勢を取つて來た時には、これは考へなければならなかつた。若しこの機會に於て、斷乎として宣戰布告がなされ、海陸空の全力を擧げて一氣に敵を擊つ、かういふ積極的な戰爭手段に愬へたならば、蔣介石の陸軍は我が陸軍の敵ではない、空軍は比較にならない、況して海軍は全然先方には無いと言つて宜い程の微力なものである。戰場に於て輝かしき勝利を得ると同時に、海上に於ても徹底的に封鎖を强行したならば、日ならずして蔣介石政權は屈服せざるを得ないであつたらうと思ふ。今日アメリカがあれだけの國力、あれだけの大海軍、大空軍を擁しながらヨーロッパを援助することが出來ないやうに、若し支那事變の初めに於て、日本が斷乎たる戰爭手段に愬へたならば、何處の國もアッと言ふ間に片がついた筈ではないか。今は歸らぬことであるが、これはもう千百年前の『孫子』にすら

ちやんと語つてある。そして古來よりの皇軍の傳統でもあつた。戰といふものはだらだらとやつてはいけない、速戰即決が宜いのだ。なほ作戰用兵の細かい點に就いて云ふならば、幾らでも批判の餘地があるであらうが、之を一言に申すならば、必要に滿たざる兵力をちびりちびり出すといふことが、これが用兵作戰の上から禁物とされて居る。『步兵操典』にも入用に滿たざる兵力をちびりちびりと出すことは宜しくない、思ひ切つてやらなければならない。かう書いてある。これは啻に戰ばかりのことではない、何事でもさうである。商賣でも、事業でもさうであらう。ちびりちびり惜氣に資本を注ぎ込む、結局何にもならぬから損になつてしまふ。初めから思ひ切つて素裸になるつもりで共處へ投資する、それが有效に働いて來て幾倍かの利益となつて生れて來る、かういふものだらうと思ふ。戰爭に限つたことではない。思ひ切りの惡いといふことが一番いけないことである。

今一つ、この際反省を要する點は、支那事變を事變扱ひにする、これは日本自身がやつた

のである。宣戰布告をすればよい。宣戰布告といふことが何か言ひ惡い理由があるならば、交戰狀態に入つたとか交戰權を行使するとか言うたら宜しいではないか。さうすれば租界地の如きは直ちに處分が出來、援蔣ルートの如きは實力を以て直ちに遮斷することが出來る。又戰場に於て第三國の利權が損傷を受けた場合には、これは交戰權を發動して居れば、その邊にまごまごして居る方が惡い、損害を受けるのが厭ならば、初めから其處を避けて居れば宜いではないか。パネー號事件もレデイ・バード號事件も、初めから交戰權の十全なる適用をやつて居つたならば、あゝいふ事件は起らないで濟んだであらうし、起きてもそれはお前の方が惡いのだ、初めから警告して居るではないか、から言うて一蹴することが出來る。然るに自分では事變だ事變だと言ふ、さうして置いて第三國から色々な文句が出る、損害賠償の要求がある。さうすると、日本はこれ程の大規模な戰をして居るのだ、この戰鬪狀態を認めて吳れ、から言つて居る。何たる不見識、何たる卑屈なことであらうか。自分では事變事

變と言ふ、向ふから突込まれると、名前は事變だけれども、これ程の大規模な戰鬪をやつて居るのだからその實情を認めて吳れと言ふ。そんな事は要らぬことである。宣戰布告をやるか交戰權を發動すれば、そんな自家撞著のことを言はぬでも宜しい、自繩自縛をやらぬで宜しいのである。世界の歴史始まつて以來、國の大小强弱を問はず、宣戰の布告をしない戰爭はあつたであらうか。交戰權を主張しない國といふものは未だ曾てないのである。さういふやり方では、丸三年掛からうと五年掛からうと、片はつかぬ。其處を直して掛からなければならぬ。國民はどんな犧牲でも拂ひますからやるべき事は確つかりとやつて下さい、から言ふ權利があると私は確信してゐる。

支那事變は現に如何なる段階にあるか。これは實情を知らない吾々としては、臆測を逞しうすることは宜しくないと思ふ。併しながら汪兆銘政權がこのたび出來たから之に依つて待望の平和が直ぐ來るのだ、さういふ風に考へるならば、それは大きな間違ひである。何故か

と言ふならば、汪兆銘政權は、當時の新聞に明白に出て居つた通り、還都國民政府であり、三民主義を奉じ、靑天白日旗を上げる政府であるから、本質に於て重慶政權と變りがないのである。これ程明白な事はない。これは事實である。さうして汪兆銘がその國民政府の首席代理であるとちやんと書いてある。本當の首席は重慶に居る。これではどうも話が合はぬ。平仄が合はぬのである。平仄を合はせるやうに非常に苦勞して居るやうであるが、平仄の合はぬのはどうにも合はせ様がないではないか。これは中々困難な事業と思はれる。阿部大使も隨分お骨の折れることだらうと思ふ。近衞聲明以來、蔣政權を相手にしない、新なる政權を打樹てる、かう言うて居るのであるから、一應この新政權は尊重しなければならぬ。けれども近衞聲明に言うて居る新政權であるのかどうか、先づ其處から檢討し、先づ首實驗をして掛からなければならぬのではあるまいか。それ故に事變解決の新段階であるとか、解決へ一步を進めたとかいふことが新聞などに書き立てられるにつけても、吾々國民は能くその實

體如何を檢討しなければならぬと思ふ。之については政府も直ぐ平和が來るなどとは思つて居らぬらしいのである。あらゆる機會に前途なほ遼遠なりと言うて居られる。然し前途遼遠では心細い。どうしたら宜しいかと言へば、これには二つの方法がある。斷乎として戰鬪手段を執ると同時に――今現に第四十何回目かの空襲を重慶に加へて居る。これなどは近來の傑作であらう。空爆などで參るものかなどと言つて居るが、空爆結構である。息つく暇もない程やつて居れば、さう年百年中穴の中に潜つて居られるわけのものではない。地上の設備が悉くやられてしまへば政治が執れなくなる、日常生活が出來なくなる。併し餘り巧なる急降下爆擊などをやると、飛行機に彈丸が能く中る。爆彈の中る代りに敵の擊つ彈丸も能く中る。ひよつと落ちて行けば非常に中りは良いが、此方の爆彈の中りの良いといふことは、向ふの彈丸の中りの良いといふことである。防禦されたる都市は當然攻擊を加へて宜しいといふのが、これが國際法上認められて居る通念である。諸君も記憶があらう。日露戰爭に於て

我が艦隊は旅順に對して間接射撃を加へて居る、又陸軍は陸正面から旅順に對してどんどん間接射撃をやつて居る。どういふ風にやつたのか、旅順の要塞内を基盤の目のやうに割つて、殊に人の住つて居る街は一段と細かく割つて遺漏のないやうにそれを撃ちまくつて居る。それが昔からの戰の常法である。穴に隱れて居る奴などを狙ふ必要はない。又此方の彈丸の中りも良いが向ふの彈丸の中りを良くするやうにする必要はない。成層圏のやうな、向ふの彈丸の絕對に來ないやうな所から雨のやうに爆彈を落すのが宜しい。それが一番安全で一番效果的である。それを今日やればよい。現在やつてゐる重慶の空爆も少し行儀が良過ぎるのぢやないかと私は思ふ。今言つたやうな仕方でやれば、もつと早く蔣介石は成都か昆明に行つて居る筈ではないかと思ふ。

いま一つは、これは『孫子』にもあるが、上は謀を擊つ、敵の謀を擊つ、次は交を擊つ、その次は兵を擊ち、その下は城を攻めるとかう書いてある。城を攻めるといふのが一番下手

で、一番巧いのは敵の謀を撃つ、敵の謀を撃つといふのは中々難しい事であらうが、少くも交を撃つ、之を今度やつて居る。今までもやつたが今度は一段と眞劍にやつて居る。香港の北寶安から陸軍を上陸させて支那軍との連絡を徹底的に遮斷した、それが交を撃つといふことである。又フランスが負け掛つたのに附け込んで、佛領印度支那からの援蔣ルートの遮斷を談じ込んで、一方は、實力をもつて既に龍州まで進んだ。これが即ち交を撃つといふことである。負け掛つた奴の足を引張るやうなことは餘り感心しないが、併し國の大事には代へられない。もつと思ひ切つてやつても差支ないと思ふ。ビルマの援蔣ルートをやるといふのも亦交を撃つといふことである。併しイギリスは頻りと澁つて居る。何故澁るか。俺の方はもう乘るか反るかの戰を歐洲でやつて居るので、援蔣の爲に送る物など何もありはしない、たゞアメリカ邊りから來る物があるのだといふ風に言つて居る。事實どうか分らないが、アメリカを引張り込んで、アメリカと日本を何處までもぶつ付けるやうに持つて行かうといふ

魂膽であらうが、そんな事を遠慮して居つては何時までも片がつかぬとあらば、これを思ひ切つて遮斷する策を執るが宜しい。要するに一方には戰鬪を積極的にぐん〳〵進めて行くと同時に、他方には交を擊つ、交通線を遮斷するといふことを徹底的にやれば、この事變の解決は遠くないと思ふのである。汪兆銘政權が出來たけれども、これは實際何の力もないのである。これとどんな約束をしたからと言つて、それが實現するわけのものではないのである。力が無いロボツトである。要は自分の實力が支那事變を解決する唯一のものである。その實力を如何に用ひるかと言ふならば、今述べた戰鬪といふ直接手段と、それから敵の交を擊つといふ間接手段、この二つより外はないと思ふ。これが徹底すれば汪政權も何も要らぬ。蔣介石は直ぐ參る。これが徹底しなければ、如何に立派な和平條約が汪政權との間に出來ても、それは物を言はないのである。蔣介石が參つたと言はない限り、それは效力を生じない、それが支那事變の現在の段階であり、實情であると私は思ふ。

それから事變が段々進んで來ると、占領地域も廣くなるし、支那人が生活に苦しむ。日本の物資を以て彼等を養つてやらなければならぬやうな羽目になる。現にさうなつて居るのである。それぢや堪らない。だから昔の兵書には、「用を國に取り糧敵に依る」と言つて居る。用といふのは兵器、彈藥、戰車、さういふ類のものである。糧敵に依る、糧食は敵のもので全部やる。今日ではさう簡單には行かぬかも知れぬが、大體糧食敵に依るといふことでなければ、日本から何もかも持出して、向ふで人民救濟をやつて居つたら、それこそ幾ら物があつても足りはしない。だから現地に於て立ち行くやうな經濟活動といふものが必要缺くべからざることになるのである。その點がどうも缺けて居りはしないか。もう少しやり樣があるのぢやないか。これが又見逃してはならぬ重大な點であると思ふ。

三、歐洲戰爭

――ナチス獨逸の立場――

偖て歐洲戰爭であるが、フランスは最早再起の見込はない。フランスの海軍がイギリスの海軍と戰爭をやり出した。恐らくイタリーは非常に喜んで居るであらう。これこそ手を拱いて地中海がイタリーに轉がり込んで來るのであるから、これ位面白い事はない。イギリスも血迯つたのぢやないかと思ふが、或はもつと圖太くフランスの艦隊を叩き潰し、佛領植民地を皆自分の手に取上げよう、カナダに逃げても只逃げるのぢやない、轉んでもたゞは轉ばない、さういふのであるかも知れない。これは餘程これからの發展を注意して見て居る必要があると思ふ。現在の情勢では、イギリスはもう歐洲大陸から全く遮斷され、北はノールウエー、南はスペインに至るまで全部獨伊の勢力下に入つた。ドイツを封鎖する、ドイツを包圍

する等と言うて居つたが、いづくんぞ知らん、今日ではあべこべになつて居る。逆封鎖になつて居るのである。地圖を見れば分るやうに、英佛海峽といふものが全部ドイツの手に歸した。ドーバー海峽は大砲で狙はれる。通れない。四十粁しかないのである。少し氣の利いた大砲は、直ぐ八十粁から九十粁彈丸が屆く。ドーバー海峽は駄目である。北の方を廻らうとするとノールウエー、デンマーク、オランダ、ベルギーなど横から狙はれて居る。と、これ亦交通が困難である。さうするとテームス河といふものは役に立たなくなる。船の出入がなくなる。それならば何處から行けるか、南の海岸も狙はれて居るとこれ亦難かしい。西岸よりする外はあるまい。西岸は南と北に入口があるが、その狹い口を入つて來るまでには潛水艦、飛行機といふものゝ脅威を受ける。その港々は飛行機の爆撃を受けるのである。大體今までのイギリスの輸出入といふものは、テームス河、つまりロンドンとリバプールでその七割か八割を占めて居るのである。この航路を遮斷され、その設備を徹底的に破壞されるとい

ふことになると、イギリスに物資が入らない。この前の戰爭ではイギリスの主要の糧食物はデンマーク、スカンヂナビヤから入つたのであつた。彼等の食卓に上るバター、チーズ、それからベーコン、雞、卵、豚、その大部分はその方面から入つて來た。イギリスの重要な產物である石炭、炭坑の杭木はこれ亦スカンヂナビヤ若しくはフインランドから入つた。それからイギリスの所要の鐵鑛石は、ナルビクの港から積出され、これがイギリスの所要の大部分を占めて居たのである。そんな物が一切來なくなる。さうすれば食糧から一般の資源に至るまで悉くアメリカ方面に仰がなければならぬ。それが海上に於て潛水艦及び飛行機に攻擊され、いざ着いて陸揚しようといふ時、再び飛行機の爆擊に依て一切の設備が破壞される。それを免かれて陸へ揚げても運輸機關がやられるといふことになると、イギリスに取つてはこれこそ死活の問題である。爆擊では參らないだらうといふ說を立てる人もあるが、私は、大陸軍をイギリスに上げることは相當困難であらうが、それは上げなくても爆擊を徹底的に

やれば参ると思ふ。人間は防空壕の內に入つて居れば助かるであらう。人間は助かつても地上の一切の施設が動かなくなれば生活は出來ない。況や大陸軍が上陸に成功するといふことになればこれは問題ではない。專門家は、ドーバー海峽の狹い所を大砲とか潛水艦とか一切のものを擧げてイギリスの總てのものをその地域に踏み込ませないやうにして、一時海峽の渡航點をドイツがしつかりと握れば、上陸作戰は多少の犧牲は拂つても先づ成功する、かういふ風に觀る人もある。これは成功するかも知れぬ。マヂノ線が突破出來ないと思つたのが突破出來て見たり、色々豫期しない事態が起るのであるから、今、成功するともしないとも豫言することは難かしいことと思ふ。併しその成否の如何に拘らずイギリスの負けることは間違ひないことである。

偖てそれならばイギリスはどうするか。カナダに逃げざるを得ないだらう、かうなるのであるが、何を持つて逃げるかと言ふと、擊ち漏らされた海軍と商船とイングランド・バンク

にある金貨である。それ以外は恐らく持つて逃げられない。それを持つてアメリカへ行つて何をするか。一々アメリカの御厄介にならなければならないのである。事實ドイツへ降伏する代りにアメリカへ降伏したといふ事になるだらうと思ふ。さういふ事態になれば、印度、エヂプト、南阿といふものは、イギリスの言ふことを肯かなくなると思ふ。本國が危くなつたら濠洲ニユージーランドは早速獨立するであらう。かうなれば、イギリスといふ國は、事實上名前だけ殘つて、昔日のイギリスとは似つかぬものになつてしまふのであるまいか、さういふ廢れは十分にあると思ふ。併しアメリカが附いて居るではないか。ところがアメリカが有效なる援助をするには、所謂長鞭馬腹に及ぼず、自分が戰爭に參加して艦隊と飛行機を提げて行くといふなら別である。併しそれをやらぬといふのであれば、たゞ物を送つて助ける、武器を送つて助けるといふならば、もう到底間に合はぬのである。アメリカの製造力は大したものであるが、イギリスを助ける爲には莫大な兵器、飛行機が要る。それに間に合は

して行かうといふには、これらの工場を建てゝ最新式の飛行機を造り出すと、かなりの日數を必要とするので、これは間に合ひさうもない。現在有力なる飛行機豫備機として持つて居るものを全部擧げてイギリスへやれと云つたやうな議論もあつたらしいが、斯んな事をしたら、アメリカの國防をどうするかといふやうな反對があつたやうに聞いて居る。それで愈ゝ助けるか助けぬかといふ問題になるとアメリカも考へざるを得ない。今のところでは參戰論非參戰論と分れて居るやうである。この間、例のスチムソンとノックスが共和黨より選ばれて閣僚として今の政府に入つた。スチムソンは格別問題はなかつたやうであるが、ノックスは非常に問題になつた。大統領が任命しても銓衡員みたやうな者があつて口頭試問がある。その口頭試問に及第しないと閣僚になれないのである。ノックスはアメリカが單獨で日本を抑へることは出來ない。蘭領印度、佛領印度或はフイリッピンに於て日本が如何なる行動を取らうとも、アメリカの單獨の力では之を如何とも出來ない。かういふ事を言つて居るので

ある。これには又激烈な反對もあつたやうであるが、銓衡員はアメリカ財閥であるから、それではうんと軍備を擴張しなければならぬ、うんと軍艦、大砲を註文して呉れる、さういふ海軍大臣なら宜しからうといふことで通つたのである。

要するに、イギリスが如何なる運命にならうとも、何時までも間誤ついて居れば、結局ヨーロッパに於て全面的に降伏するより外はない。それが厭ならカナダに逃げ出してアメリカと合體するか、直ぐにアメリカに頭を下げてアメリカと一緒になる。何れにしてもイギリスの國といふものは世界の主力としての存在を失ふのである。そこでドイツとアメリカが對立した狀態になるといふことを先程述べたのは、その點である。

ドイツとソビエトの間が今回のバルカン方面の問題を契機として惡くなるのではあるまいか、といふやうな觀方もある。ソビエトといふ奴は、火事場泥坊みたいなものであつて、洵に品の惡い國である。併しフランスが徹底的に叩きつけられてイギリスも危い、この際にド

イツの御機嫌を損ずると後で酷い目に遭ふ位のことは知つて居る。ソビエトの實力はフインランド戰爭で能く實證されて居る。日本に對してはノモンハンで酷い目に遭つて居る。ドイツ人は、このフインランドの戰爭でソビエト・ロシアの武力といふものをもう多寡を括つて居るのである。あんなものはちつとも痒いことはない。鎧袖一觸だ、かう言つて居る。ソビエトはルーマニアを嚇したり、フインランドを取つたりする位の事は樂に行くのであらうが、ドイツとなると相當に苦手である。ソビエトといふものは自らを知るもので、ソビエト・ロシアになつてから以來未だ曾て大國と戰つたことはない國である。何時でも弱い國を相手にして居る。それであるから、彼に海の方に、日當りの好い方に出て行く道を開けてやれば、ドイツと戰ふとか、日本と戰ふといふ、さういふ大それた陰謀は、今日の實力を以てしては出來ない國柄にある。これは間違では決してない。

イタリーは地中海の四人として今日の地位に甘んずることは出來ない。ローマ大帝國の昔

に還るのだ。かう言つて進んで居る。非常な力み方であるが、如何にも資源が貧弱であるし戰に對しそれ程强いかといふことが疑問とされて居る。この前の戰爭に相當弱かつたものであるから、今度も大したことはあるまい。かういふわけで、相當に過小評價されて居る。併し、ムツソリーニが政權を取つて以來、根本的に、精神的に立直つて居る。かう見れば見られるらしいのである。今まで隨分見物をぢらせてゐたが、遂に戰爭に參加した。又あれがドイツの望む所であつたらしい。餘りに早く參加させてイタリーを英佛から突つかれると、ドイツがこれを助けなければならぬ。西部戰線の一正面の作戰が二正面になる。これは面白くない。出來るだけ中立國にして置いて、イタリーを通してドイツの欲しい物が入つて來ればそれで宜しい、かういふ考へ方であつたらしいのである。そのドイツの思惑通りにイタリーが動いたのであつた。グラ〳〵として如何にも汚いやうに見えたが、そこがドイツと步調を合せてやつた實に巧妙なる共同作戰であつた。今日ではさういふ風に見るのが當つて居ると

思ふ。これ程世間から評判の悪い役目を買つて出たのであるから、愈々戰爭の片がついたなら、相當な分け前を要求するだらうと思はれる。又それが狙ひであつたらうと思はれる。

そのイタリー、ドイツ、ソビエトの將來の發展戰が、バルカンを通じてペルシヤ方面に伸びる時に、これが一點に集まるのである。ドイツは昔から、三B線（スリー・ビー・ライン）といふことを言つて居る。ベルリン、ビザンチウム、バグダツト、この線を狙つて居るのである。メソポタミヤの方にずつと出てペルシヤ灣の方に出る。結局印度まで突き拔ける、かういふ狙ひ方であらうと思はれる。イタリーは地中海を一手に握つてスエズ運河、紅海を拔けて印度洋に出て來ようといふ狙ひである。之を巧く境界をつければ話合がつきさうであるが、話のつかないのはソビエトとドイツの間である。ソビエトとしてはペルシヤ、裏海を狙つて居る。進んで印度を狙つて居る。これは今のところ問題になつては居ないが、將來問題になる性質のものである。今はドイツがさういふ點に觸れないやうにして、ソビエトを取持つてやつて居るだら

うと思はれる。

偖、世界大戰が一應片がついた際に、世界がどういふ狀態になるであらうか。また如何なる狀態に持つて行くべきであらうか。私は世界は自ら三つに分れる運命にあると思ふ。南北アメリカを一緒にしたアメリカ・グループ、歐洲とアフリカを一緒にした歐洲グループ、日本を中心とした東亞グループ、さういふものに當然分れる運命にあると思ふ。この間にあつてソビエト・ロシアといふ小異分子が挾まれて居る。之を如何に扱ふかといふことが將來の問題であらう。その時にはイギリスなど問題にはならない。イギリス、フランスはもう世界の主力ではなくなつて居るのである。

四、日本の實力

偖て最後に我が日本の實力である。この世界史の一大轉換期に當つて、日本はその最後の鍵を握つて居る、私はさういふ信念を持つて居る。そんな强がりや、そんな自惚れを言うても仕様がない、かういふ風な批評も出ると思ふが、實際に實力があるのかといふのが現實の問題である。私は實力はあると思ふ。それは物が足りないとか、金が不自由であるとかいふ問題ではない。若し日本の物が足りないが爲に物が入らなければ明日にでも參る、かういふのであるならば、アメリカが今まで日本に對して一切の物の輸出禁止をやつて居れば日本はまゐる筈である。油もやらぬ、棉もやらぬ、機械類もやらない、鐵屑もやらぬ、一切の物を日本にやらぬといふことになれば、日本がまゐる筈である。ところがそれを何時でもやれる爲に日米通商條約の一方的廢棄をやつたのである。その期限が切れて今日では通商上は無條約である。それでもやはり日本の欲しい物はチビ〳〵であるが、寄越して居る。といふことは何を意味するか。物や金の問題では日本はまゐらぬとアメリカも見て居る。愈〻となれば

實力を以て臨むより外ないといふので、アメリカの大海軍を全部太平洋に集中して全空軍を日本に向けて配備して居る。世界で一、二を爭ふイギリスの海軍も今日ではもう相當にいたみ、アメリカは何と言つてもその量に於ては世界第一の海軍である。その海軍と空軍とを以て日本に對して全力を擧げて備へて居るといふことは、これ程日本の實力を實證する何ものもないではあるまいか。これ以上の日本の實力の證明法はない。然るにも拘らずアメリカが非常な海軍擴張をやるとか、七割増加するとか、何十億といふ豫算を出してどうするとか言つて非常にそれを頭痛に病む人がある。そんな事は今までに度々あつた。世界戰爭の時も恐ろしい大豫算で大々的の擴張を計畫して議會を通過した。アメリカの繼續費といふものは三年計畫なり五年計畫で、例へば海軍の大擴張豫算を議會を通す。偖て通つたいふと日本のやうにそれが年々繼續費として默つて居つても出るのかと言ふと、さうではない。年々の豫算は又その年改めて協贊を經なければならぬのである。世界の情勢といふものは三年も五年も

同じ狀態で續くものではない。早い時は一年と經たぬ中に引繰返る。猫の目のやうに變る。さうするとアメリカの豫算もこの猫の目を追うて變つて行く。この前の大擴張も遂に何時の間にか有耶無耶になつて、三年經つても五年經つても出來上らない。さういふ實例は今迄も澤山ある。新聞などに出て居る豫算に驚く必要はない。又今日空軍が飛躍的進步を遂げ、主力艦が空軍の爆擊に依つて爆沈されるこの時代に、主力艦の比率がどうならうが、そんな事は大した問題ではない。若し今の大擴張計畫が實現して大艦隊を造り、主力艦の大軍を以てアメリカが東洋の海面に押迫る、かういふやうな時期が來るとすれば、これは非常に面白いことである。目標が良いと彈丸の中りも便利である。襲擊するのに十艘、十五艘だと方々探し廻らなければならぬ。三十艘も居ると爆擊も非常に張合がある。飛行機の空爆もあり、潜水艦もある。諸君が西太平洋の圖面を御覽になるとすぐ分る筈である。委任統治の南洋群島といふものが、日本に取つて軍事上何物にも代へ難い頗る重要なものである。これが曾て國

際的の問題にならうとした時、當時の海軍大臣は、刀に賭けても返さぬと、かう言つて居る。無理矢理にあれを取上げようといふのなら何時でも相手仕ると、かうやつたのである。それはどういふ事かと言ふならば、委任統治の南洋は、小笠原群島からマリヤナ群島、東京灣からずつと二百哩南に群島が下つてゐる。その群島の盡くる所に東マーシヤル群島、東カロリン群島、西カロリン群島、彼處へ二千數百哩に亙つて鵬翼を擴げて居るわけである。日本本土は北は千島から南は臺灣まで二千六百餘哩、これは今度の事變で海南島に伸び、新南群島にまで伸びて三千餘哩になつて居る。日本の群島がアジアの東岸から南へかけてずつとアジアの半面を包圍して居るであらう。これでさながら突張棒をかつて居るが如く小笠原群島、マリヤナ群島が南北に二千哩に亙つて屛風のやうに羅列して居る。その下にマーシヤル群島、東西カロリン群島が二千數百哩に亙つて足場を擴げて居る。それで西太平洋をすつかりカヴアして居る。かういふ重大な地形はないのである。若しこの南洋群島が人手に渡ると

いふことになると、日本の國防は非常に危いものになる。委任統治の南洋群島は全部集めて面積としては神奈川縣程もないのであるから知れたものではあるが、南洋興發などは彼處で砂糖黍を作つて大いに財産を作り上げた。けれどもその經濟的價値といふものは大したものではない。併しこれ等の島々は大きな艦隊が幾つも入るやうな大珊瑚礁もあれば、又土地も均らせば飛行場が幾つも出來るやうな島が澤山ある。艦隊、潜水艦の根據地が幾らでも出來る、飛行場が幾らでも出來る。昔ならば、船着場がない海岸が崖になつて居るやうな島は、これは價値のない島である。交通が出來ない。ところが今日では飛行機が發達した結果島の上に相當に平な土地さへあれば、それを幾らでも開發して發着することが出來る。開發するだけの餘地がなくても飛行場は十分出來る。そこで昔とは島の價値といふものが非常に違つて來たのである。南洋群島の瘠島が手を掛ければそれ〳〵立派な飛行場になるといふことは、大砲でも爆彈でも沈まない無數の飛行機母艦が太平洋にずつとばら撒いてあるといふことに

なる。これ位確かな航空母艦はあらう筈はない。これが非常な働きをするわけになるのである。東はアメリカより東亞に向つて來るものは皆この南洋群島にぶつつかる。ぶつつかるまいとすれば赤道以南を迂回しなければならない。航海術で言ふ所謂グレート・サークル・セーリング、大圏航法に依つて近距離を航海しようとすれば、アラスカからアリユーシヤン群島、千島の方に寄つて通らなければならない。さうすると、一年の大部分は霧が掛つて居る。私は七月から八月にかけてシヤトルから横濱へ歸つたことがあるが、當時十六日間掛つたが十四日間霧にかけられ通し、さういふ所は大艦隊も行動することは出來ない。飛行機も容易に來れない。眞中の良い所を通つて來ると今の網にぶつつかる。西からやつて來ても同じこと、新南群島あり、臺灣、南西諸島、かういふ地形に相當な構へがしてあれば側背を脅かされぬことなのであるから、容易に日本の近海に乘込んで來ることは出來ない。昔イギリスの國防の第一線は敵の海岸に置く、これがイギリスの傳統の國防であつた。ネルソンが雄

名を馳せたトラフアルガルの海戰もそれから來て居るのである。ツーロンとかブレストとか云つたやうな軍港の前には何時もイギリスの艦隊が構へて居る。中のフランス或はスペインの聯合艦隊が出て來るとそれを直ぐ叩く、さういふやり方であつたが、今日ではそれが出來なくなつて居るのである。出來なくなつても尙且つ海軍が優勢である限りは、イギリスの位置は盤石の重きを成して居つたが、潜水艦が發達し、更に飛行機が飛躍的發展を遂げた今日では、比較的に言へば、水上を遊弋する軍艦の價値は低下したといふことになるのである。これが國防の觀念を根本的に變へなければならぬ時代になつたのである。そこで、イギリスが大艦隊を持つてアメリカへ逃げる。アメリカの艦隊と一緒になる。素晴しい海軍力が共處に出來上る。それが東洋に押掛けて來る。日本はどうするか、といふやうなことを言つて素人を嚇かさうとする。そんな馬鹿な事はない。アメリカとヨーロツパとは大體三千哩海上が離れて居る。勿論近い所はもつと近いが。アメリカと日本の距離はどうだ、東京からハワイ

まで三千四百五十哩、ハワイからサンフランシスコまで二千二百哩、パナマ運河の方に行けばまだ〳〵遠い。僅か三千哩のヨーロッパを救ふことも出來ない。三千哩ですら長鞭馬腹に及ばずの歎ある。その海軍が、未だ未だ遠い六七千哩を距てた東亞に對して何が出來るか。算盤を置かなくとも簡單な算術で分ることである。無論その前にはシンガポールは頂戴しなければならない。フイリツピンも頂戴して置かなければならぬことは、申すまでもないことである。

蘭領印度、佛領印度等がこの節非常に喧しい問題になつてゐるが、識者はもうずつと以前から言つて居る。日滿支の經濟ブロツクといふことが、滿洲事變當時から叫ばれたのであるが、色々考へて見ると、日滿支の經濟ブロツクでは足りない物が多々ある。ゴムをどうするか。石油をどうするか。錫をどうするか。ボーキサイトはどうするか。色々詮索して見ると足りない物だらけで、どうしても南洋を加へて日滿支プラス南洋といふ大地域に亙る經濟圏

これを申しても、東亞の新秩序といふことをしつかりと確保しなければ、經濟圈にならぬ。しつかりした經濟的基礎の上に立たなければならぬ。これは砂上の樓閣であつてはならない。東亞の新秩序の建設、東亞の安定と言ふことの自給經濟圈の確立といふ基礎が出來て初めて東亞の新秩序の建設、東亞の安定と言ふことが出來ると思ふ。そしてまた我々の新秩序建設とは、植民地搾取の上に立つ誤まれる歐米舊秩序を打倒し、眞に八紘一宇の大理想を實現することであるから、歐米の桎梏に惱む南洋、印度の植民地民族を解放し、曾つてそれ等の民族が日本古代文化圈に在つて榮えた如く、今日再び皇道の光の下に發展せしめ、繁榮せしめることこそが、日本の義務であり、新秩序建設、東亞安定の理念でなければならぬ。

五、日本の世界政策

先程世界が三つのグループに分れるといふことを述べたが、結局かういふ理論の上に立つべきだと思ふ。私共の信ずる世界政策は、地域的に民族的に共同生活の出來る、しつかりした文化、經濟圏を持たなければならぬ。その文化、經濟圏の上に立つた歴史的、民族的、地域的の統一體でなければならぬ。かういふ世界政策で進まなければならぬと思ふ。この世界政策は公明正大である。東洋固有の資源、東洋固有の土地人民を白人が搾取するといふ法はない。これは當然世界の歴史が轉換する。舊秩序が新秩序に變る時に、この不公平なる狀態は是正されなければならぬのである。その機會が今や到來して居る。不介入どころではない。この公明正大なる世界政策を以て之を天下に聲明し、これが實現に邁進するのでなければ、この事變解決の意味は私はないと思ふのである。嘗て有田外相の外交政策轉換に關するラヂオ放送もありそれは洵に結構なものであつたが、今まで率直に言ふならば、見透しが悉く間違つてゐた。英佛が最後の勝を得ると思つて居つたのである。それが全然引つくり返つたの

で見透しの全然間違つた責任者が、間違ひましたと言ふなら話は分るが、急いで看板を塗り替へて初めからさうであつたやうな顔をしても、それはもう追ひつかない。政治も外交もやはり信といふことが元である。民信なければ立たずと『論語』かに言つて居る。國内ばかりではない。國外に對しても信がなければ立つものではない。信とは何か。信とは一貫性である。これはかう信ずる、この道を進むと言つたら終始一貫それを信ずるのが信といふものである。狀況が變れば昨日まで彼の方に向いて居つたものが今日は此方を向く、フラ〳〵して居つて其處に何の信があるであらうか。今までの支配階級、上層部、歷代の政府悉く間違つて居つた。その外相のみを責めても當らないのである。今日はもう時代が變つて居る。今までの古い頭で古い角度で、英米人の頭を通し、英米人の眼鏡を通して物を觀て居つたのが皆間違つてゐたのであるから、それをしつかり樹て直さなければならぬ。樹て直すといふことは、根本的の樹直しでなければならぬ。基礎工作から直して行かなければならぬのである

から、たゞ看板を塗り替へただけでは間に合はぬのである。さういふ臨時急造のやり方で、將來の世界をどうしようかと云つたやうな世界政策が實行出來るわけがない。これは我が國民として、今述べた點には既に目覺めて居る。今まで目覺めなかつたのは政府の當事者だけであつた。併し今からでも遲くない。非を悟つてからあるべきであるといふところに上下一致して邁進するといふことになれば、まだ／＼終電車には間があると思ふ。要するに、歴史的に民族的に地域的に固まつた大地域の經濟圏を持つて居る、さういふ一大國家群が出來て初めて東亞が安定し、ヨーロッパが安定し、アメリカが安定する、この三つのグループが安定すればそこで初めてそれが相談して世界の資源の處分が出來るだらうと思ふ。但し近い將來に一應成立するであらう南北アメリカ・ユニオンが、先に述べた樣な條件に當嵌まる國家群であるかどうかは、一寸考へれば直ぐに分ることで、それは實に多くの矛盾を含んで居るものであり、そしてその事は直ちに次の世界の趨勢を暗示するものであるが、それを此所に

述べることは止め、大體この様な見透しの下に之からの日本の世界政策が行はれなければならぬ。そしてこの世界政策は間違ひないと私は確信する者である。之を内外に聲を大にして聲明しても、何處からも非難の打ち所のない公明正大、俯仰天地に恥ぢないものだと思ふのである。八紘一宇もさういふ段階を經て初めて至るものであると確信して居る次第である。

東亞安定と日本の決意

一、事變延引の根本原因

我が國が、現に直面して居る重要なる問題は、多々あるが、こゝでは當面の支那事變解決を、如何に促進するか、また我が日本の實力果して如何、この二つの問題を中心として、率直に卑見を陳べることにする。

さて、支那事變の解決促進に就いては、國民の一人残らずが非常に心を惱まして居るやうに思ふ。その關心の要點は、一體事變は何時解決するのであるか、事變の現段階はどの邊にあるのであるか——といふ點にほかならぬのである。それについては、先づ以て、聖戰以來滿三年有餘、かやうに事變が延引を重ねた根本原因は何處にあるのか、その原因の核心をつ

き止めて見る必要がある。

これは見る人の立場により自ら異つた所見が生れて來ると思ふが、私の見るところでは、少くとも四つの原因を擧げることが出來る。その第一は、我が日本は事變に對して極めて不準備であつたばかりでなく、甚だしく不決斷であつたことだ。何となれば、滿洲事變を經、國際聯盟を脫退し、上海事變を戰つた後であり、蔣介石が十數年に亙つて、徹底的に排日、抗日意識を植付けて居つたのであるから、早晚何事か起るといふことは、豫期しなければならぬことであつた。しかも、その徵候歷然たるものがあつたのである。然るにも拘らず、漫然これに臨んで、現地解決、不擴大主義を採らうとした。こゝに準備と決斷の大なる不足があつたと思ふ。

その他にも例はいくらもある。今更及ばぬことであるが、戰火が上海に飛び、蔣介石が日本に對して攻勢をとつて出て來てゐる以上、どうしても肚を決めなければならなかつたので

はないか。では如何に肚を決めるか。それは宣戰を布告するか、交戰權の全面的行使を布告するか、孰れにしろ、思ひ切つた手の打ち方があつたと思ふ。然るに、戰火は北支から中支に、更に南支にと移りながら、依然事變で通さうとする。何處までも事變であるため、屢〻思はぬ困難に逢着せねばならなかつた。あれ程の大戰爭であれば逸早く戰禍を避けない限り側杖を食ふのは當然であるが、第三國はこゝぞと文句をつける、損害賠償を云々する。又、我が海軍は海上の航行遮斷をやつてゐるにもかゝはらず、第三國の商船は、援蔣補給の武器や彈藥を滿載して、目の前を通つて行く。それをたゞ拱手傍觀するのみで、如何ともすることが出來ない狀態であつた。更にまた、天津、上海のごとき租界は蔣介石政權の抗戰策源地であることは、明白な事實であるにも拘らず、いつまでも手がつけられない。戰爭に非ざるが故に、事變なるが故に、殘念ながら手がつけられないのである。

今度の事變は、有史以來の大戰爭である。東洋に於ては無論のこと、世界史上にも比類が

少ないばかりか、將來に於てもこんな大戰爭は滅多にないであらう。從つて、我が日本は、國の總力を擧げて、この事變解決に對處邁進しなければならぬ。しかるに國家の總力戰體制はどうであるか。昭和十三年春の議會に於て、國家總動員法案が如何に行惱んだかは、世人の記憶に生々しい。これらの事實は、我が國の今次事變に對する不準備と不決斷を立證して居ると云つても過言ではないであらう。

二、四つの原因を一掃せよ

事變延引第二の原因は、今次事變の眞の意義が國民の各階層に徹底してゐない憾みがあることだ。一例をあげれば、闇取引のごときが、それである。

今更云ふまでもなく、今次の事變は歴史的必然の所産である。今までの舊秩序が一掃され

て、新たなる秩序が建設されんとする戰ひである　その新秩序建設の先頭に起つたのは日本であつて、滿洲事變なるものが、抑〻この事變の先驅をなして居るのである。また歐羅巴ではこれと同じ意味に於て、ドイツが歐洲に新秩序を建設し、世界に新しい秩序を布かんがために戰つてゐるのである。

惟ふに、東亞の新秩序、建設は砂上の樓閣であつてはならぬ。必ずや確乎たる基礎工事の上に建設されなければならぬ。確乎たる基礎工事とは東亞の自給自足經濟圈を確立することにほかならない。卽ち自活圈、生命圈確保の戰爭であるといふ意義が國民の各階各層に徹底するならば、生命を君國の爲めに捧ぐるは正に此の時なりといふ覺悟が、起らなければならない筈である。だが、顧みて甚だ遺憾の點が多い。

精動に對しても觀念論ばかりで、具體的なものが伴はないといふ不平を聞くが、確かに具體的な方法も必要であらう。しかし、末梢的なことよりも、根本精神の建直し、卽ち時局を

徹底的に認識し、一切を君國に捧げるといふ精神の建直しが、精動の本當の狙ひでなければならない。

第三には、支那の抗日意識が、普及し徹底して居ることだ。これは恐るべき事實である。支那の少年が數個の手榴彈を提げて、我が堅固な陣地の前に、平氣で突進してくる、かういふ一身を捧げたところの勇氣といふものは、信念からでなければ出て來るものではない。それほど蔣介石政權の抗日教育は普及し、抗日意識は徹底して居る。

更に第四には、第三國の支那支援である。支那が獨力で日本に抗する力のないことは明瞭であるが、今日に到るまで依然として、抗日を續けて居る所以は、全く第三國の物質的、精神的支援があるからである。

以上の四つの原因が一掃されるならば、今次支那事變は、忽ち解決の運びとなるであらう。全部でなくても、その中一つでも二つでも、徹底的に改善さるれば、これまた事變の解

決を大いに促進し得るであらう。何となれば、この四つの原因は、相互に密接不可分の關係にあるからである。

三、事變の解決促進の手段

さて、事變は現に如何なる段階にあるか。

私の見るところでは、既に終末の段階に近づきつゝあると思ふ。近頃の情報によれば、支那軍の武器は極めて乏しく、野砲のごときは殆どない。迫撃砲、機關銃等はまだ相當あるが小銃などは一人々々に行渡つて居らない。我が日本軍の裝備に比ぶれば、全く比較にならぬほど貧弱である。これらの消息は、武器、彈藥が十分に手に入らぬことを、實證して居るのであるが、同時に食物にも不自由し、物資缺乏にも困憊してゐる事實がある。なほ、その上

に歐洲動亂以來、英佛が東亞から手を退いたこと、この機會を逃さず、日本が香港を始め、佛領印度支那、ビルマ、或は又沿岸の小さな港灣等の援蔣輸血路を徹底的に遮斷したこと、更に一方、わが海、陸荒鷲の連日に亙る重慶その他の主要部爆擊が、熾烈であること等のために、蔣介石政權は致命的の打擊を蒙り、その結果、近頃重慶にも和平論が頻りに擡頭して居るやうである。

かゝる事實、及び情報を綜合して考ふるに、蔣介石政權が斷末魔の氣息奄々たる喘ぎを、辛うじて續けてゐる狀態であることは、間違ひがない。しかし、非常に弱つて居ると云つても、このまゝ荏苒日を送つて居つたのでは、容易に解決はつかない。この弱つてゐる際にこそ、一氣に死命を制するため斷乎たる積極的な手段が講じられなければならぬ。

その積極的な手段について、二三の例をあげれば、何處までも徹底的に討伐することが、その一つだ。守勢をとつてゐては、敵の生命を存續させるだけであるから、こゝぞといふ所

に全精力を注いで攻勢をとる。かういふ方法が先づ考へられなければならない。
次に、第三國の交通を、尙一層徹底的に遮斷すること。イギリスやアメリカの機嫌を如何に損じようが、そんなことに頓着せず思ひ切つて斷行しなければ、完全なる航行遮斷は望めない。しかも、このことは、日本は少しも英米を恐るゝものでない。支那を徹底的に叩く爲めには、如何なる手段をも辭せざることを如實に敵に示すもので、直接の效果に劣らぬ間接的の效果を期待し得るのである。
その他、種々の手がある。實力をもつて租界を回收するといふ手もあれば、香港は元來敵の策源地であるから、イギリスに立退いてくれと要求する手もあらう。或は所謂、東亞の經濟圈を確立するために、南洋方面に進出するといふ水際立つた手段もあると思ふ。

四、熟慮反省すべき要點

更に、いま一つの手段は、國際關係の根本的改善である。根本的改善と云つても、どこの國とも仲よくしろ、八方美人で行けといふ意味ではない。事變を解決し、東亞の新秩序を建設し、それによつて世界の建直しを敢行しようといふには、事前に何處が味方で、何處が敵であるか、その限界をはつきり認識しなければ、出來る筈がない。敵性國家の明白なるがごとく、同じ使命の下に、同じ目的に進んでゐる國と、提携しなければならぬといふことも、また明白である。動もすれば、英米に對する媚態の不可なるが如く、獨伊に對する媚態も亦排すべしといふものがあるが、さういふ意味ではなく、戰爭目的の遂行上何れの國と提携して行くべきかを、國策として決める必要があるといふ意味である。英米を一方に載せ、さら

に獨伊を他の一方に載せて、天秤的に双方をうまく操つてやつて行かうなどといふことでは
この國家重大な時局を切抜けることはむづかしい。もつと大膽卒直に、日本の眞意を内外に
宣明し、國を賭して、この難關を突破するのだといふ決意を明かにすることによつて、今日
の外交の危機が始めて打開出來るのであると私は確信して居る。

それから、もう一つは、蔣介石との直接交渉といふ手である。現在、汪精衞政權と交渉を
續けて居り、順調に進んでゐるのは、寔に結構であるが、汪政權と如何に立派な和平協定が
出來たところで、一方に蔣介石政權が存在し、依然として抗日を續けてゐる間は、事變の完
全なる解決とは云へないし、またそれは絶對に出來ない。

昭和十三年一月十六日の近衞聲明に、『國民政府を相手とせず――』といふ一句があるが、
その年の十一月三日の近衞聲明には、『國民政府と雖も、從來の政策を一擲して、更生の實を
擧げ、新秩序の建設に來り參ずるならば、日本は敢てこれを拒否するものではない――』と

いふことをはつきり言つて居るのであるから、蔣介石政權との直接交渉が出來ぬ謂はれはない。しかも、時々刻々變つて行くところの世界情勢に對應するために、事變の解決が焦眉の急なりとせば、蔣政權との直接交渉といふことにつき、相當熟慮すべきであらうと思ふ。

事變の解決に關し、更に一歩踏み込んで、我が國を見直せば、今までの經濟が國策の根本を左右して來たこと、所謂經濟至上主義が、事變を永引かせたのだとも云ひ得られる。

何となれば、經濟によつて總てのものが動くからだ。總てのものが算盤で動くからだ。金はこれだけ、物はこれだけしかないといふので、物や金で政治の動きを一々抑制する。若し今後の軍事行動も經濟によつて一々左右されるといふことであれば、この事變は恐らく永久に目鼻がつかず解決はのぞまれないかも知れぬ。その點、深く國民の反省を促したい。今日新體制の問題が喧しいが、當面の支那事變を、速かに解決するといふ眞劍味を伴ふところに新體制成立の眞の意義を認めたいのである。

五、國防上から見た南洋群島の價値

次には、日本の國防上の地位について、檢討して見たい。

先づ、地理的に考察すれば、日本は、北は千島から南は臺灣まで延長二千五、六百哩に亙り、今日では、これが海南島に飛び、新南群島にまで延び、恰もアジヤの東から東南にかけて、アジヤ大陸を取卷いて居る。唯單に取卷くのみならず朝鮮といふしつかりした橋が架つて、その先に滿洲といふ一心一體の國があり、大陸に不拔の根據を占めて居るのである。かういふ地形を見る時、日本に諒解なしに、いづれの國も、シベリヤや支那大陸に對して勝手な振舞ひは出來ない筈であつて、これぞ日本に與へられた自然の特權であり、資格なのである。この三千哩に及ぶ一連の島々によつて、形成されてゐる鎖は、これが唯一筋であれ

ば、弱いのであるが、東京灣から南方へ直下二千浬、伊豆七島、小笠原諸島、マリヤナ群島と續いて、赤道の北に横はる委任統治の南洋群島と連繫して居る。而してこれらの委任統治群島がまた東西二千數百浬に擴つてゐる。つまり北は大陸に打ち込んだ楔、それから日本の本土更に南洋群島といふやうに、縱横に鎖が張りめぐらされ、これらの島々によつて、百八十度以西の太平洋は、殆ど全部しつかりと握られて居ると云つていゝ。

南洋の委任統治群島はこれを經濟的に見れば、その價値は知れたものである。しかし、軍事上の價値に至つては大したもので、かつて確か大角海相が『南洋群島は刀にかけて離さない』と、云はれたのを記憶してゐるが、それほど重要で、この群島を日本が持つてをればこそ、東亞は安定なのであつて、正に東洋平和の一大礎石である。

例へば、いまアメリカから大艦隊を以て、東洋に進出を企てたと假定しよう。その場合、ハワイから太平洋の中央を西航しフイリツピンに出る道が航海上一番樂な航路である。北方

のアリユウシヤン群島方面から來る路もあるが、この航路は、濃霧の爲め、大艦隊の行動に適しない。それからまた、赤道の南を迂回する路があるが、これは非常に距離が遠い。アメリカが東亞に進出する目標は、日本にあるに違ひないから、この赤道の南を廻る航路は、アメリカにとつて甚だ好もしくないものと思はれる。從つて、日本の南洋群島を始め、西太平洋上に、張りめぐらされて居る網は、東よりする攻撃に對して、防禦上非常に役立つてゐるのである。

更に、西南方面から來る路も考へられるが、錯雜極りなき此の方面の地形を考へるとき、その中を通つて來ることは、至つて危險で、今日のやうに飛行機や潛水艦の發達した時代に於ては、相當の困難が伴ふであらう。殊に臺灣、海南島、新南群島等、日本の領土が伸びてゐるから、これを横に眺めつゝ、敵の艦隊がひた押しに押してくるといふやうなことは、容易に出來る業ではない。

かやうに、東からも南からも、或は西からも、日本に大艦隊を差し向けることは、相當困難であることが常識上肯けるであらう。

六、焦燥するアメリカ海軍

今日アメリカでは、思ひ切つた海軍の大擴張が、企圖されてゐるが、しかしながら、歐洲の戰爭に於て、世界に誇るイギリスの大艦隊が、一體何をなしつゝあるかを仔細に檢討するとき、いまゝでの海軍力の觀方、考へ方は、根底から改められねばならぬ。

ドイツの海軍力、イタリーの海軍力のごときは、イギリスの海軍力に比較すれば、物の數ではない。しかるに、飛行機が想像もつかぬほど飛躍的進歩を遂げた結果として、海岸附近や狹い海洋では、英の戰鬪艦や巡洋艦は思ふ存分活動が出來ぬ狀態である。

いま假りに、日本とアメリカの大艦隊が渺茫たる太平洋の眞中で、恰も土俵上で角力を取るがごとく戰ふ場合を想像すれば、戰鬪艦や巡洋艦を數多く持つて居つた方が無論有利であらうが、そんな馬鹿氣た合戰は起りやうがない。

戰爭は昔から一方が攻めると、他方が守るといふのが自然の定石である。守る方はのこのこ出ては行かない。敵を自國の海岸に引き寄せて、隙を狙つて一擧殲滅の手段に出る。古今東西を通じて、海戰といふものは、必ず何處かの海岸近くに於て行はれてゐる。それは戰史が實證するところである。今日イギリスなり、アメリカなりが、我れこそは世界一の海軍なりと自負して、堂々と隊伍を整へて、この西太平洋の群島の中に、飛び込んで來るといふやうなことは、非常に無謀な話だ。ノルウエー、オランダ、ベルギーの海岸、さては東部地中海等に於て、イギリスの海軍は苦い經驗を嘗めたのであるが、それと同じ苦い經驗を、東洋に於て繰返すといふ物好きがあるとすれば、それはまことにお目出度い話である。

さういふ次第であるから、軍艦の數の如きは、左程問題とするには當らない。勿論、必要なだけの數量は建造保有せねばならぬが、大體將來戰が、如何なる經過を辿り、如何なる方面に起るべきかを考へれば、潛水艦なり、飛行機なり、もつと效果的な戰鬪の手段があることに氣が付く。その點各國共に、既に氣が付いて居るのである。

昨今イギリス海軍は、巡洋艦、驅逐艦、及び水雷艇、これに飛行機を加へて、商船隊を掩護しつゝ、英佛海峽からドーバーを通つて、テームス河に入つてをる。しかも、多くの艦船をドイツ潛水艦や快速艇や爆撃機の好餌に供しながら、尙且つ遮二無二、これを强行しなければならない事實は、果して何を意味するであらうか。何もテームス河の方面のみを選ばなくとも、よささうなものだ。ところが、そこが問題なのである。

ロンドンの人口は四百萬と云はれてゐるが、これを日本流に附近の人口を合算すれば、千萬人に近い。この大きな人口を養ふためには、どんな大きな損害を蒙り、犧牲を拂つても、

直接テームス河から物資を陸揚げしなければ、間に合はないやうな危急の事態に立ち到つてゐると見られる。されば、イギリスはドイツの上陸作戰を待たないで、早晩參るのではあるまいか。

しかし、思へば、ドイツの潛水艦、飛行機、快速艇のために、海上の逆封鎖をされて、イギリスの國運が危急に瀕するといふ時に、これを效果的に防止出來ないイギリス海軍だとすれば、何のために存在を誇つたのかと、反問せずにゐられない。海軍は必要に相違ないが、海軍そのものゝ內容は、十分に檢討して見る必要がある。イギリス海軍こそ、いゝ見せしめである。

七、資源問題と蘭領印度

次に國防の要素としての資源問題については、私は豫てからから考へてゐる。今日わが日本では、物資不足の聲が喧しいが、それは百パーセントを望むからであつて、世界何處の國も十分だといふ國はない。食糧のごときも日本の國は決して不自由はしない。若し、足りないとすれば、それはやり方が惡いのだと思ふ。固より、足りない物資も色々あるが、煎じつめれば、問題は油の一點に歸する。なるほど油は足りない。そこでアメリカに頭を下げなければならないわけであるが、何時までも平身低頭して、アメリカから油を買はなければ、起ち上れない日本であらうか。東亞の新秩序建設は出來ないのであらうかといふ疑問が起る。この問題を解決せずして、事變の解決も何もあつたものではない。

それでは如何にすればいゝか。それには東亞の自給經濟圈の確立、政府がいふところの大東亞の共榮圈の確立をなす以外にはない。アメリカが油を賣らないなら、嫌が應でも生きて行く上からは、その必要な油を手に入れなければならぬ。その油は、蘭領印度にある。これ

が十分に使へるなら問題はない。何故にそれが使へないのか。要するに日本の決意一つの問題ではあるまいか。

いまアメリカが、日本に支那や南洋を自由にさせたくないといふ肚の底は見え透いてゐる。そして絶對的に油などを賣らない場合には、日本は勝手に南洋に手を出すだらうとの懸念より、アメリカは全海軍力、全空軍力を擧げて戰時動員を行ひ、日本の威嚇にかゝつてゐる。だが、日本の海軍力は、アメリカの海軍力に比して、些の遜色もない。今日では大損害を受けてゐるイギリスの海軍よりも、遙かに優勢である。それ故に、日本に對して、アメリカは全力をあげて海軍と陸軍と空軍の戰時體制を以て、日本を抑へにかゝつて居るといふのが、現狀なのである。日本の海軍力が如何に素晴しい存在であるかゞこれによつて實證されて居る。

この事實は同時に大西洋方面ががらあきとなり、フランスを見殺しにし、イギリスの危急

存亡も顧みる遑がないことを物語るものである。

そこでアメリカの海軍は、急に大擴張を計畫し始めた。それは太平洋方面に於ては日本を抑へ、大西洋方面では獨伊を抑へる意圖からであるが、結局、戰爭でも結末を告げ、熱が冷めたらまたどうなるか分らない。日本としては、よくその經過を見てから周到な計畫を樹てるがよい。

それはさて措き、私は南洋といふものは、土地も民族も資源も東亞固有のものであると思ふ。それが往年、白人のために無理矢理掠奪されたのだ。いまや世界の歴史が變り、新しい秩序が世界に齎されようといふ、この一大轉換期に於ては、これが正しい狀態に直されなければならない。正しい狀態とは、本來の歸屬に還るといふことにほかならない。これをモンロー主義と同意義で片づけようといふやうな考へ方もあるやうだが、私はそれは採らない。何故なら、モンロー主義はアメリカの現狀を維持して、他國の容喙を許さぬといふ主張だ。

東亞の現狀を維持して、他國の容喙を許さぬといふ主張だ。東亞の現狀を維持して、他國の容喙を許さぬのでは、日本は徒らに拱手傍觀して居らなければならない。さうであつてはならぬ。東亞の安定なくして、東亞民族の福祉增進は得られない。東亞の和平なくして、世界の平和はあり得ない。東亞の安定のために、東亞民族の福祉增進のために、東亞固有の土地、資源、民族の返還を此の際要求せねばならぬ。日本の國策がそこまで徹底し、これを內外に宣明して憚からないといふこと、これが外交の眼目でなければならないと思ふ。

八、日本の決意すべき秋！

要するに、今日は世界の戰國時代である。戰國時代には戰國時代の道德といふものがある

筈だ。平時の道德と、戰時の道德とは、自ら違はなければならぬ。これは西洋人も認めて居るところだ。さればこそ、國際法に於ても、戰時國際法を彼等はちやんと認めて居るではないか。

世界の情勢は刻々に變化しつゝある。ヨーロッパの戰爭も、この儘何時までも續くとは思はれない。大體、これで片がついたといふことになれば、東亞に大きな影響の波及するのは明かである。それを考へる時、新體制も結構であるが、これは云はゞ半永久的のものである。しかし、國際關係は焦眉の急を要する問題だ。先づ第一に、轉換外交の促進から着手し、新體制の方は、急がずあせらずゆつくり腰を落着けてやつても、間に合ふのではないかと、思ふ次第である。

時難克服の先決問題

一

歐洲大戰は愈〻本格的に發展し、支那事變と相俟つて世界大戰の危機が目捷に迫つて來てゐる。つい先頃までは、獨英妥協し大戰終熄近しといふもの少くなく、所謂消息通にかういふ說をなすものが多かつたのは、恐らく濫讀多聞の結果、不知不識のうちに巧妙な宣傳に乘ぜられたものであらうと思ふ。

從來、國際情勢を判斷するに兎角からした誤斷が少くなかつた。事變不擴大、獨ソ提携、對米關係等、みなそれである。かゝる誤斷が今後に於ても繰返されるのでは、國の將來を危殆に陷れる虞があり、この際大いに猛省すべきである。

思ふにかゝる誤斷は、主として東西大戰に共通する歷史的意義を徹底的に把握し得ないか

ら生ずるものであらう。

世界は今や歴史的轉換期に立つてゐる。舊秩序に對する新秩序の戰、即ち現狀維持に對する革新の戰は、人爲に依つて避け難い歴史的必然であつて、その信念に於て將又利害に於て到底妥協の餘地のないものである。舊秩序に沒頭してこの必然性に目覺めずとすれば、戰局の見透しは今後と雖も誤なきを保し難いのである。

今一つ注意すべきは、近代戰の樣式は根本的に變つた。武力戰は最早戰爭の主なるものではないといふ見解が一般に流行したが、これまた最近のノルウエー戰に於てその皮相の淺見たるを暴露したものである。經濟戰が效目がない時に武力戰が本格的に發展するのは當然のことである。

經濟戰は長期戰となり、結局浪費戰となつて能率的でなく、人類に及ぼす災禍は武力戰よりも却つて莫大なものであることは、恰も天災にみる自然の如何に破壞を逞しうするかを想

起せしめるものがあるのである。戰に臨んで春日遲々たる光景は、正に人類の墮落、自然の冒瀆である。

二

由來、希望と現實とは一致しないことが多い。事變以來、その感が特に深い。故に常に最惡の場合を豫想して最善の準備を怠つてはならない。古人の所謂人事を盡して天命を待つとはこれで、天命を待つとは、神明に誓つて良心の命ずるまゝに最善を盡し、成敗を天に委し、俯仰天地に愧ぢざる心境を云ふのである。

さて、支那事變が未だ解決しないにも拘らず、歐洲戰が早くも世界戰的推移を示しつゝあることは否み難い事實である。歷史は繰り返す。伊・ソ・米も早晩參戰の可能性がある。歷

史的轉換期であるこの大詰に於て、最後の鍵を握るものは、誰であらうか。わが日本を措いて他に何國があるであらう。これは決して强がりや自惚れではない。皇國の國體とその地理的環境による國防上の地位とが相俟つて、自然さうならしめるもので、これ皇國天賦の使命である。

わが固有の實力と現下の國情は、果してこの未曾有の時局に對應して、よく天賦の使命を遂行し得るであらうか。我等は、虚心坦懐先づ以て自己を内省、検討すべきである。

わが固有の實力として地理的環境に依る國防上の地位は極めて優秀である。近來對米關係の逼迫と共に、ややもすればわが海上國防に不安を感ずる人もあるやうであるが、大小無數の島嶼を縦横に連ねて西太平洋に蟠居し、且つアジア大陸に不抜の根據を有するわが地理的環境と、大元帥統率の下に一億國民忠誠の結晶である百戰不敗の海、陸、空軍の儼存する限り、わが海上國防は大盤石であるといつて憚らぬのである。なほこれについては、一再なら

ず海軍大臣の言明もあり、我等は責任ある軍部當局に依賴してよいものである。

また近來しきりに物資不足の訴を聽くが、眞に不足してゐるものは幾らもなく、事實は統制經濟の缺陷に依り物が偏在して不足現象を呈してゐるに過ぎないので、何等悲觀する必要を認めない。石油、屑鐵その他眞に不足してゐるものがないでもないが、孰れも遠からず解決するであらうし、その間ストツクを以て辨ずることが出來、また努力次第で即ち輸入の途もある。更に世界戰爭ともなれば問題は自ら新たになり、東亞固有の資源は、當然取つて用ひることも出來る。周知の如く、東亞の資源は東亞民族の用を辨じて餘りあるもので、現に白人國の橫領に依つて大部分は占有されてゐるが、東亞新秩序建設の聖業を指導する我國が、これを利用し活用するに何の憚るところがあらう。

たゞ留意すべきは、人間の物慾には際限ないことである。古來物の萬全は期し難い。されば未だ嘗て萬全の物的準備を以て開戰したことを聽かない。物心兩面の要素は、素よりその

一つも缺くことは出來ないが、心的要素こそ根本的第一義的要素たることは論を俟たない。「汝の劍短きを歎く勿れ、一歩踏み込む勇氣こそ肝要なれ」とは、たゞに武道のみの戒めではない。

三

最近汪政權がわが全幅の支持に依つて、新たに成立したのは、慶賀に堪へないことであるが、これを以て直ちに事變解決近し、待望の平和の曙光見えたりと早合點してはならぬ。卒直に云へば、これは事變處理の一段階に過ぎない。重慶政權が第三國の支援下に依然として存在する限り、これの討伐壞滅乃至屈服收容は、專ら之を日本の實力に俟つ他なく、從つて眞の解決は、寧ろ今後に於ける我國の努力精進の如何に係るといふべきである。而してこれ

が爲には、なほ相當長期に亙つて幾多の難關を突破する準備と覺悟とを新たにしなければならぬのである。

わが國防上の地位は優秀である。長期戰と物資の不自由は固より覺悟の上である。たゞこの際最も憂慮に堪へないことは、現下の國内情勢と國際關係である。(一)事變以來政府がしきりに更迭して政局の安定を缺き、(二)經濟統制が機宜を失して物資偏在、生活不安の聲巷に滿ち、(三)政府の威信地に墮ちて國法行はれず、(四)官民相信ぜずして漸く前途の希望を失はんとしてゐる。かういふ風では、わが民族の傳統たる獻身殉國の精神もその精美を發揮する由もない。國内の情勢がかくの如きでは、果してよく國家の總力を擧げて聖戰の目的を完遂し、十數萬の將兵の忠死と、銃後國民の犧牲とを徒爾ならしめざることが出來ようか。

更に國際關係を見るに、英・米・佛・蘇は何れも明かに新政權を否認し、新秩序の建設を阻止せんとしつゝある。然るに從來物資輸入の切なる要求よりして英米との摩擦を極力避け

ようとする餘り、媚態をこれ事とし、甚しきはこれと提携して事變を解決せんとする傾向すらある。もし日本にして眞に親英米たり、これに依存する態度を棄て得ないとするならば、我と一體であるべき汪政權もまた然らざるを得ない。かくして日、汪、蔣共に英米依存であるならば、事變の解決、新秩序の建設は百年淸河を待つが如くであつて、何時これが達成を期し得るであらうか。わが外交現下の實情は、これを一片の杞憂として葬り去ることが出來ようか。忌憚なく云へば、その明白なる矛盾に惱まされつゝも、眼前の利害に捉はれてその日暮しをしてゐるのが、僞らざる實情ではあるまいか。重ねて云ふ。大戰の歴史的意義は新秩序の建設にある。故に、わが外交の指導方針もまたこの意義に徹し、この線に沿うとき、初めて自主外交の名に愧ぢず、聖戰の目的の完遂に邁進し得るのである。

内政外交が現狀の如くであるならば、わが固有の實力も發揮するに由なく、たゞに事變の解決が困難であるのみではない。世界大戰に善處するが如きは、思ひも寄らないことであ

る。

累卵の危急に處する刻下の急務は、かゝる行詰りたる現狀を打開し、大戰の意義把握に依る指導原理の確立によつて、人心を一新し、政治を强化し、國民の忠誠と國家の總力とをあげて一點に集中する眞の戰時國家體制を確立することにある。

四

かゝる更始一新の建直しは、妥協苟合の能くするところではなく、區々たる技巧の及ぶところではない。況して宣傳やお祭騷ぎの領域ではない。眞に未曾有の危機に目覺め、千載一遇の好機に勇躍するわが同胞國民の心からなる反省、自覺、發憤を基礎として築かれたる國民組織の上に、强固なる、如何なる既成勢力にも左右されざる政權が樹立されて、初めて可

能なことである。これ固より容易の業ではない。併し時難克服の唯一の途である。これ以外に絶對にその途のないことは、既往の事績がこれを實證して餘りあるものである。

今や時難克服の責任は、直接我等國民の双肩に懸つてゐる。凡そ忠節を盡すは日本人の本分である。この際、眞の忠節は、一切の行きがかりを一擲して、協心戮力、更始一新、國内建直しの大業に邁進するより大なるはなしと確信するものである。

（昭和十五年六月「大亞細亞主義」誌）

日本とナチス獨逸

昭和十五年十一月十一日印刷

昭和十五年十一月十四日發行

——(¥0.60)——

著作者 末次信正

發行者 北原鐵雄
東京市神田區神保町三丁目一三

印刷人 小關求馬
東京市神田區神保町三丁目二七

印刷所 正隆堂
東京市神田區神保町三丁目二七

發行所 アルス
東京市神田區神保町三丁目一三
電話九段二一七五・二一六七
振替東京二四八八八番

・ナチス叢書・

ナチス叢書

第二次大戰後の獨逸	藤澤親雄著
ナチス演說集	木村捨象著
ナチスの文學	ゼッケル著
ナチス藝術	井上清一著
ナチスの植民政策	小倉虎治著
獨佛關係	鈴木啓介著
ナチスの出版政策	福田虎雄著
歐洲新體制と獨逸	海軍大佐 平出英夫著
ナチスのユダヤ政策	清水宣雄著
ポーランド進軍	陸軍大學教官 於田秋光著

四六判並製約百五十頁・定價各冊六十錢・送料一冊十錢五冊十四錢

ナチス叢書